



I はじめに

分科会基調は協力者から討議課題をもとに提案された。

全同教 70 周年ということで、事実と実践で語らしめる先達の取り組みが語られている。差別の現実から深く学ぶということ。このことは、いま、より重要になってきている。寺澤亮一さんは「同和教育は生徒をばかにしない教育だ」と言っていた。当たり前のようなのだが、いまも自分を問うている。このことができているのか、否か、と。これは、実践継承ということでもある。

さまざまな状況にある子どもたちの「いのち」「こころ」「からだ」が危機を訴えている。一人ひとりの生活実態を丁寧につかみ、課題を明らかにしていかなければならない。同和教育はたった一人からでも始めていくべきものであり、同時に、差別と闘うには仲間が必要である。そして、同和教育は生徒に合わせて学校をつくっていく取り組みである。そうした取り組みのなかで、私たち教員が、保護者が、子どもが、どのように変わっていったのかを、何に気がついたのかを明らかにしていこう。

このような呼びかけの後、報告・討論に入っていた。

II 報告及び質疑討論の概要

－報告1－④

小さな積み重ねから自尊感情を育み、人と人をつなげる教育の創造 (徳島県人教)

－主な質疑と意見－

香川 人権を確かめる日のとりくみを行うことになった経緯はどのようなものか。中高生による交流は中高とまたがっているのが難しいものだが、ど

のような工夫があるのか。

報告者 人権を確かめる日は、統合される前から阿南工業で取り組まれている。

徳島 人権を確かめる日がつくられた経緯は、人権指導主事の声掛けで「人権の日」を「人権を確かめる日」として月 1 に設定したことからはじまり、現在まで継続している。

報告者 教員が一人ずつ順番に資料をつくり、人権委員の生徒と協議して実施していく。教員にも朝の打合せで内容を周知していく。中学校と高校と一緒に活動することは活動日の調整で難しい面がある。中学生は運動部と掛け持ちだったりするので。

徳島 「中・高生による人権交流事業」は 17 年前に始まった。「友の会」が母体となっている。生徒数が激減している中、集まってきた生徒は「人と人とのつながりができてよかった」と感じている。なんとか継続して、さらに新しい形も模索していきたい。

香川 さらに継続してほしい。

大分 県下でも厳しいと言われる学校を回ってきた。高校は全県一区になっており、格差は激しくなっている。「先生、この学校が周りから何と言われているか知っているの？ ひどい言い方をされているんだよ。それなのに、先生はなんで頑張っているの？」という声を生徒から聞いた。こうした状況で、生徒に自尊感情をどうやって育むかということは永遠のテーマである。一人ひとりの子どもたちとどう向き合っているのかを聞かせてもらいたい。参加者からも、こうした学校の状況を考えてもらいたいし、とりくみを知らせてほしい。

報告者 あこうバンブークラブの3人の生徒は、先輩の姿を見ながら成長していった。自尊感情を育むためには、何らかの活動をしたときに、否定されずにできたことをそのまま受け入れてもらえるということを少しずつ重ねていくことによるのではないか。

協力者 自尊感情をズタズタにされている子どもたちの姿がある。どうすればよいのか。

大分 「生きている意味がない」といって親に、自分に刃物を向ける子どもがいる。友だちは進学校に行き、自分はダメなままだと思われている。親

までもが子どもを他の子どもと比較して子どもを痛めつけている。学校が、教師が、そうした動きに加担しているのではないか。教員が子どもを比較の中で見てはいないか。「きみという人間は限りなく大切なんだ」と伝えていかないと自尊感情は育たないのではないか。「比較は最大の暴力だ」と思う。親でさえも比較の中で子どもを見ている。自尊感情について考えるのなら、そのことを外すことはできないはずだ。

徳島 報告者のいる高校は、部落差別撤廃を県内でいちばん最初に条例化した市にある。特別措置法がなくなったとき、「高校生友の会」に代わるものとして「人権ふれあい子ども会」をつくって行政が予算化した。「高校生友の会」のつながりを絶やさずにやってきたのである。

－報告2－④

竹田高校の「1.31人権集会」を通して

(大分県人教)

徳島 ムラの子が一人いるということをどのようにして知りえたのか。

報告者 県人教が持っている情報は推進リーダーには共有されるようになっていく。入学前に家庭訪問に行ってもいる。この生徒は、子ども会には入っていない。定期的に家庭訪問をし、思いを聞き取っている。

千葉 子ども会は地区出身以外の生徒が3人いるという話だったが、この子ども会の趣旨はどのようなものなのか。また、この子ども会の意味を生徒たちは知っているのか。

報告者 子ども会は小学校、中学校、高校とある。地区出身者がいるところに子ども会はおかれている。さまざまな経過があり、今は、みんなよく学習しており、学習をしたいからといって入っている。

千葉 地区の外の生徒が「なぜこの集会所で勉強会やっているの」と考えるようになるわけだが、子ども会の意味をどのようにして伝えているのか、いないのか。

報告者 もともと差別事件があった中学校の生徒たちが参加しており、部落差別について学ぶということに参加している生徒はみんな知っている。

大分 基本的に学習会の参加者はムラの子で、差別事件があったとき子どもたちは2週間泣き続けた。その子たちは人権集会を開いてくれと教員に求めた。集会で子どもたちは「私たちは部落出身です。一緒に差別をなくす仲間になってほしい」と訴えた。子ども会に集う子どもたちは「部落出身だから学習するわけではない。学習しなければいけないのは差別をする方だ」という考え方を踏まえている、そして、ムラの子ではない子どもも参加するようになっている。

三重 教材に対して「部落差別は昔のこと」という生徒の意見はどうして出てきたのか。子どもたちの「寝た子を起すな論」に対してどう向き合っていくのか、どういう展望を持っているのか。

報告者 教材は結婚差別の事例でかなり古いものだった。だから「部落差別は昔のこと」という反応が出てきたのかもしれない。子ども会の生徒の「学校の授業って、いつも古い話ばかりだよな」という感想もあった。アンケートの結果を見て、「いじめはない」ということで喜んでいるような、模範解答が出てくればそれでよしとする教員の在り方がある。「正しい答え」が出てこないことを恐れてしり込みしているようでは、本当の取組はできないのではないかと。

大阪 人権学習のなかで差別とどう闘うのかを考える報告で勇気づけられた。差別とは何かを考えることが大切なのではないか。差別と出会ったときにそれが差別なのかどうかと気づけるかどうか問われている。

大分 人権の視点を学校の中にどう埋め込んでいくのか。差別事件があったときに、それにどう立ち向かうのが重要だ。差別を受けた子どものつらさに寄り添いながら、学校の在り方を根本から変えていくことが大切だ。竹田高校が偉かったのは、差別事件を受けて人権集会をつくり、それを継続させているということだ。取り組みをすると事件が起きることがある。だから取り組みをしないのではなく、取り組み続けていくことで人権を大切にする学校ができあがっていく。

報告者 みんなが前向きに頑張っていけるために

人権教育がある。かわいそうだから、ということではなく。すべての教育の在り方が人権教育なのではないか。

1 日目の総括討論

徳島 大分の報告を聞いて思ったのは、「人権を確かめる日」を始めたとき、「差別心があろうとかまわれない、本音を語ってください」と同和教育主事から言われたことを思い出す。自分が主事になったとき、さまざまな集会に顔を出すようになったことを思い出しながら聞いていた。

徳島 人権ホームルームの中身はどうなっているのか。中学校を卒業したばかりの1年生にどういったプログラムを展開しているのか。

報告者(大分) 進学校でもあり、なかなか時間が取れない。人権ホームルームは、1年生で3回、2年生で3回、3年生で2回となっている。1年はSNSによる部落差別など、2年で部落問題学習に入り、ここで1.31人権集会を組み込んで5時間分にした。3年は就職差別の問題、結婚差別の問題をやる。

香川 「どうせ〇〇中学だから」という言葉が子どもたちや地域から出てくる中学校に異動した。1本目のレポートを聞いて、何かに取り組むことで、自尊感情を育てていることに励まされた。2本目のレポートを聞いて、自分がかかわったムラの子の、今もつづく苦しみについて思いをはせている。

徳島 差別と出会ったときに、それが差別だと気がつけるようになるにはどうすればよいのかを考えている。差別を生むのは知らないことによるのだ、というふうに自分に言い聞かせてきた。差別につながる言葉や行動をみて、それは「差別につながるよね」と言えるかどうかが重要だ。

神奈川 初めて参加した。多くのことを学ぶことができた。

大阪 学ばなければ差別をされていることにさえ気づかなくなる。「なぜ人権学習をするのか」と教員に問われたこともある。だから、「なぜ人権学習をするのか」を人権学習のスタートに置いている。社会の変化の中で「新しい人権」が生まれてくる。そうすると必ずそれを侵害しようとするものが出

てくる。だから、絶えず学びつづけなければならない。人権学習をスタートさせるとき、教員の仲間に「知らなかったがゆえに、誰かを傷つけてしまった経験を付け加えてくださいね」と必ず伝えている。教育虐待の実態もある。なぜ、勉強しか見ないのか。どうしてそういう保護者になってしまったのか。そうした保護者を変えていく方法はないのかについても考えている。

徳島 「本音で先生も話さんと」という話だが、話したくない人にどういう方法で話をしてもらうように工夫をしたのか。

報告者(大分) 竹田高校に着任する前は「攻撃的な教員」だった。管理職や周囲の教員にも生徒にも。自分のことを語ることで、周囲から「変わったね」と言われるようになった。感想を書いてくれと教員に頼んだとき「子どものころ無理やり感想を書かされた。だから、今はもう書かなくていいでしょ」と返されたこともあった。実践を続けていくしかない。推進リーダーも降ろさせてもらって、「仕事ではなく、学習会に行く」というスタンスで今は活動している。

大分 学習会の後、あるムラの子が、「先生、おれは部落に生まれてよかった。学習会に参加してきてよかった。そうでなければ、平気で人を差別するような人間になっていたかもしれないから」と告げた。学校の中で、なかなか人権教育に理解を示してくれない教員がいる。そんな中で、大分の報告者が変わっていく姿を見て、「大人は変わらない」という考え方が変わっていった。

大分 指導案だけでは、思いや熱が入っていかない。生徒たちには時間軸では昔のことだが、竹田高校という場、この場で差別があったということを意識させたい。差別に対する怒りを教員が持っているのかも問われている。

三重 「家庭訪問で生徒や保護者が変わる。それは素晴らしいが、それを美談として押し付けなくて」という意見を教員から聞いたことがある。家の中で、自尊感情を奪われている子どもがいるかもしれない。そのことを知るには、家庭訪問が欠かせない。同僚と一緒にやっていくことの難しさもある。

子どもに自分の変容を見てもらおうということもある。「家庭訪問」を美談にするなという意見にどう返していけばいいのかということも考え続けていきたい。

島根 新採用で、初めて参加した。知識を伝えるだけではだめなのだとことを知った。

香川 はじめて人権担当になって、情性で家庭訪問に行っているようではだめなのだとことに気づかされた。

徳島 管理職をしている。管理職も巻き込みながら、取り組みを進めていってほしい。もっと応援できればと自分も反省している。

昨日の振り返り

昨日の2本のレポートの共通点は、長い反差別の取り組みが報告されていたことである。「人権を確かめる日」のとりくみ、「1.31 人権集会」のとりくみが報告された。討論の中で、差別と闘っている児童・生徒たちの声が語られた。また、差別とは何か、差別に出会ったときそれが差別だと気づけるかどうか、ということが問われた。

－報告3－④

「せんせい、にほんにきて、よかった」

～外国をルーツとする生徒との関わりから～
(千葉県同教)

福岡 外国につながる生徒と関わる中でさまざまな課題を感じている。言葉、在留カードの手続き、保護者の課題などさまざまである。保護者支援としてどのようなことがあるか。また就労についてはどうか。

報告者 手続きについては、付き添い支援が必要である。就労することで、在留資格を「特定活動」に変更することができる。

千葉 アジア圏、中東の言語を使う人たちとどのようにコミュニケーションをとっているのか。相手の人の言語をとおしてコミュニケーションするときどのような工夫をしてきたのか。

滋賀 行政にいて外国につながる生徒の支援をしている。翻訳支援について、ハード面でどのような

工夫をしてきたのか。

報告者 言葉を発してもらい、マネをしてコミュニケーションをとっていく。ひとつの単語を通して多言語に訳して生徒たちとやり取りしている。音声翻訳機器を使うこともある。翻訳ソフトについては、文書作成ソフトの英語経由で多言語に翻訳するという方法がある。そして、生徒に確認をしていく。テストをすべて6か国語に翻訳している。母語で記された試験問題は生徒も安心できる。

大分 「教育の鉄則は分からなかったら子どもに聞け」である。それがなされている報告だと思う。報告には「私は K に会う前に予見を持って K と出会いたくなかった」とある。予見を持たないというのは大切だが、中学からもたらされる情報も一つの事実として受け止めていく必要はあるのではないか。「生徒の情報を共有し合わなくていい」という教員たちがいる現在、情報共有をすること、事実と実践を確かめ合うことの大切さは確認した方がよい。

報告者 この記述には迷いがあった。否定的な情報だけがもたらされていたので、このような記述になった。今考えれば、「手のかかる生徒」という情報に対して、さらに踏み込んだ聞き取りをしていくべきだった。

大阪 学校をあげて外国につながる生徒の支援をしているのに、教員たちが「スタンダードな授業に終始している」実態に対してどのような取組を展開していこうとしているのか。

報告者 職員全体で授業プリントには必ずルビを振るということは確認できている。しかし、学習指導要領にこだわって硬直化してしまっている教員もいる。これをいかに解きほぐしていくか。自分自身もスライドソフトを使って授業を工夫するようになっていく。

－報告4－④

知って気づいて寄りそって

～Aと過ごした1年間～ (大阪府人連)

千葉 通訳支援の実情はどのようになっているのか。

報告者 羽曳野市から派遣手配をしてもらっている。

千葉 どのような言語があるのか？

報告者 ポルトガル語、ベトナム語、中国語などがある。

徳島 日本語指導担当とはどのようなものか？

巡回とは？ 対象となる生徒の数は？

報告者 大阪は外国籍生徒が 18 人いると一人加配がつく。現在は 40 人の生徒を 3 人で巡回している。市内の5つの中学と1つの義務教育学校と16の小学校がある。そうした点在する学校の拠点として峯塚中学校がある。巡回の対象は 40 人程度だが、外国につながる生徒を含めるとより多くなる。

千葉 「何人も修学旅行に行っていない」という生徒の声があった。大阪府全体での情報共有はどのようにになっているのか。羽曳野市内では、情報共有できているのに。

報告者 日本語指導連絡協議会が定期的に開催され、府内での情報共有はある。

大阪 A のスピーチはさまざまな積み重ねによって生まれた。現在、高校 2 年の A はどうしているのか。

報告者 弟の家庭訪問に行ったときに、高校から送られてきた授業料の督促状を見つけたので、高校へ連絡をしていった。

香川 A をとりまく環境が整っていると感じた。羽曳野市の不就学の子どもたちの把握は？ 「取り出し授業」の難しさ。子どもたちのモチベーションは？ 時間数は？ 初期指導は？

大阪 1 名が不就学だったが、学校につなげることができたので、現在、不就学はゼロになっている。

報告者 しりとりで食文化の違いが分かる。時間数は週1時間から何時間もやる子どももいる。実技系の科目は教室で受けさせるようにもしている。

大阪 当事者の話を聞いて知るということが大切だ。若い人のなかに「人権に対しての壁」のようなものがあるのではないかと感じる。あらためて、当事者の話を聞くことが大切だということを確認したい。

大分 元気が出るレポートだった。修学旅行に行けないということについて、これでいいのかと感じた報告者がいる。これは「何が差別かということに気づけた」ということ。内申点がない外国につながる生徒の「定員内不合格」があった。その子がどう生きていっているのか。

大阪 小学校で日本語指導をしている。自分の娘が A さんと同じ学校で学んだ。先生がハラル弁当を生徒と一緒に食べているといったことも娘に聞いた。素敵なことだ。

千葉 日本社会の状況の中で、日本人を信用してくれない外国につながる生徒の保護者がいる。この不信をどのように払しょくすればいいのだろうか。

報告者 A の家族は、中村哲さんをリスペクトしている。何度も家庭訪問をすることで信頼関係ができていく。

大阪 こころない言葉を投げかけられた生徒にどのような声掛けをしているのか。

報告者 「こころない言葉」の原因は何かを言った側も含めてゆっくりと聞き取っていく。

2日目の総括討論

大阪 羽曳野市は 11 名で 30 人ほどの生徒の巡回指導をしている。A が 5 年生の時に面倒を見た。国に帰りたい子どもたちに、どういう思いで日本語を教えていけばいいのかを考えてきた。子どもたちが踏ん張れるのは、友だちがいるからなのだと思う。

大阪 自分が人権に関して考えていることが正しいのかどうかの確認をするためにここにきている。当事者が声を上げることも大事だが、周囲の人間が反差別の声を上げていくことが大事なのではないか。そして、差別の現実を知るために当事者の話を聞いていく。

大阪 差別と出会ったときに何も言えない。これをどうするか。子どもたちの声を聞いていくことが大切だ。「喜怒哀楽」の話があった。自分の話ができるということが大切だ。子どもと保護者との間の日本語の力の差を認識して、保護者の語りを聞いていくことが大切であり、子どもたちには親を誇り

にしていてほしい。子どもたちの連帯も必要だ。
兵庫 私か暮らしているムラはベトナム人が多く暮らすようになっていて、保育所も多くのベトナムの子がいる。外国人への差別と部落差別は地続きになっている。部落のなかで空き家になったところにベトナムの方が入居している。子どもたちへの支援と同時に保護者への支援が必要だ。外国につながる生徒を支えていくために部落差別との闘いに学ぶ必要がある。

大分 何をしたらいいかは、目の前の子どもの中にある。自信を持って取り組んでいてほしい。初めて家庭訪問に行く教員から「家庭訪問は武勇伝ですよね」と言われたことがあった。家庭訪問は「きょういく」だ。保護者を呼びつけるのではなく、「今日、行く」ということだと伝えた。そうして送り出した教員は、家庭訪問で多くのものを得たようだった。

大阪 横に立ってモノを言う人、寄り添って声を上げていく人が必要だと思う。そのためには知ること。そして、差別に対して怒ることができるかどうか。それなのにケアをされている子どもへの妬みが出てきてしまう。スーダンから来た子どもに何が寂しいのかと聞いていった。すると「遊びの仕方がスーダンと違う」ということが分かった。それなのに日本のやり方を押し付けてしまう。教材は自分たちの生活課題の中にある。「だまれ中国人」という発言があった。なぜなのかの聞き取りのなかで、「区別しただけ」という教員の見方もあったが、「それは差別だ」と返していった。そのことばを投げつけられた子どもの気持ちを思うことができない教員のすがたを変えていきたい。

大阪 知ることは大事だが、それで止まってしまっただけではダメ。怒りや行動につながっていかねばならない。教職員集団の中の考え方、価値観が子どもたちに影響を与える。教職員が変わっていかねばならない。

千葉 私は部落出身だが、外国につながる生徒たちの姿は、幼かったころの自分の姿と重なる。勉強のできない人の気持ちが分からない教員に置いてきぼりにされているおれたちがいた。諦めないで先生たちは取り組んでほしい。

千葉 自分が若いころ、2週間学校に来ない生徒がいた。電話だけして、何もしなかった。家庭訪問に行っても会うこともできなかった。毎日行ってもあってももらえなかった。次年度の4月になって会うことができた。家庭訪問をしたからといってすぐ何かが変わるということではない。でも家庭訪問をしつづけて、信頼関係をつくっていく。通訳支援が必要で、支援がないと頑張っている教員が疲弊してくる。行政の協力が必要だ。

報告者(大阪) 私にできることがあれば、千葉に行きます。

香川 やさしい日本語の4つのルールは「やさしい言葉で、ゆっくり、はっきり、短い文で」である。実践してほしい。

奈良 実際の現場に赴いて話を聞くことが大切だと考えて、今回参加した。生徒たちも同じで、夜間中学に行つての交流や防災センターの映像や展示を見ろという取組に手ごたえを感じた。

島根 定時制で仕事をしている。1年次で外国ルーツ生のクラスをつくり19単位ぶんの日本語科目をつくり、サポートをしている。

Ⅲ まとめ

協力者からのまとめは次のようなものとなった。「いのち」「こころ」「からだ」の危機に対して家庭訪問をして、生徒の姿を浮き彫りにしていく。このことの大切さを確認することができた。知ることの大切さを確認することができた。自分のやってきたことの中にあつた無知、さらに言えば知ろうともしていなかつた自分の姿を振り返つた。勇気と元気をもらつた分散会となつた。